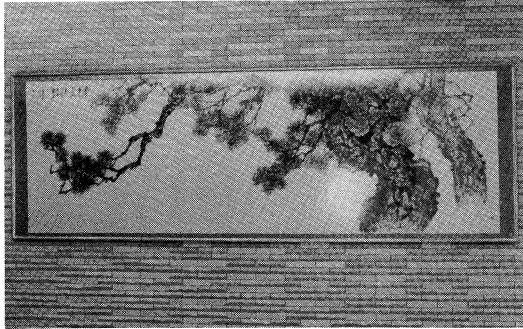
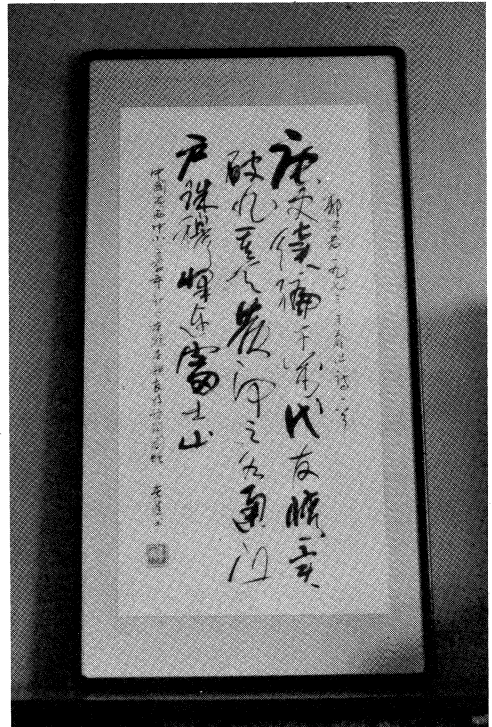


# 国際交流レター 第4号



## 中国・韓国から書と絵の贈り物

本学を表敬訪問した、韓国・忠清南道の大田大学理事呉應準氏から絵=上=、中国・広西壮族自治区教育長の余明炎氏から書=右=のプレゼントがあり、友好のしるしとして本学に飾られている。



## CONTENTS

中国との交流すすむ.....	2~5
教育友好訪問団来学 永平君留学中 教員 学生訪中団が広西大学訪問(西) 探検部 が桂林の鍾乳洞調査を計画 中国の学校 について(李)	
昭和59年度外国人留学生.....	5
韓国との国際交流.....	6~7
アンニョン・ハシムニカ 韓国ゼミ旅行記	

留学生生活一年間を経て(金)	
昭和59年度教職員海外研修者.....	7
モンタナ短期留学生報告記.....	8~10
モンタナからの来訪者 キャロル大学との交 流 教員交換プログラム.....	11
モンタナ研修サマープログラム近づく.....	12
留学生のための日本語教育(三石).....	13
events.....	13

# 中国との交流すすむ

## 「教育友好訪問団」が来学

中華人民共和国広西壮族自治区「教育友好訪問団」団長余明炎氏（広西教育会々長）以下7名が2月24日来学。学長、国際交流委員長等と懇談した。同自治区は県が姉妹関係にあり、同自治区桂林市は熊本市が友好都市として交流を深めている。

一行は県内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学等の教育機関をくまなく視察し、県立美術館、伝統工芸品、県民総合運動公園を見学した。

本学では学長の大学現状説明に熱心に耳を

傾け、その後図書館、計算センター、研究棟等の学校施設を巡回した。途中メモを取りながら質問をくり返す姿もみられ、一行の熱意を感じた。



学内を見学する教育友好訪問団の一行

## 永平久雄君(経済学部3年)、中国・広西師範大学に留学中

本学経済学部3年永平久雄君は、現在広西師範大学中文系(国文科)に留学中である。これは熊本市と桂林市が姉妹都市の縁組を行なってからの具体的な友好交流の重要な柱となるべき共同事業の一環として始められたものである。先ず57年4月に桂林市からの3名の留学生を熊本市がうけいれ、続いて58年9月に今度は熊本市からの2名の留学生を桂林市がうけいれたものである。この第一回の留学生の選考にあたって、商大・熊大から推薦された学生に対して、中国側の準備した中国語試験が実施された。この試験のレベルは専門の学生の3、4年程度の難しさであった。幸い本学から推薦した永平君、熊大から

推薦した樋口君ともに合格し、広西師範大学から入学許可書が熊本市に届き、それをうけて昨年9月、2名は桂林に出発した。

受け入れ側の桂林市及び広西師範大学の2人に対する配慮は大変なもので、先ず3万元かけて生活環境の整備を行ない(因に、中国の普通の労働者の給料は70元位)、その上2人のために専任のコックさんを2人つけて食事の世話をし、月々1人に100元の奨学金を支給するという至れりつくせりの待遇である。

又、学習面では2人とも中文系1年のクラスに編入されているが、それぞれ特別のカリキュラムが用意され、中国語、中国事情等の

個別指導もうけている。永平君を指導されているのは中文系の李譜英教授（全国大学文学改革学会理事、広西語文学会副会長、中国語言学会会員）で、その指導ぶりも大変行き届いたもので、2人の語学力の上達ぶりは目を見はるものがある。幸い2人の学生とも、必

死の努力をしているようで、李教授も2人の努力と進歩の速さにかなり満足しておられるようである。帰国まであと数ヶ月、更に精進して、第一次の留学生として、又熊本の代表として大きな成果をあげるよう期待されている。

## 本学教員学生訪中団が広西大学を訪問

本学助教授 西 紀昭

昨年12月末、本学の教員4名、学生14名からなる友好訪中団は広西壮族自治区を訪れ、広西大学では教員や学生との交流を行なった。

これは熊本学生訪中団として、これまで2回上海周辺を訪問したのに続く、第3回熊本学生訪中団であるが、今回初めて熊本と姉妹関係にある広西壮族自治区、桂林市を中心に参観訪問を行なった。参加した教員は、牧野、宮崎、山崎、西の4名である。

日程は12月22日出発、12月29日帰国という7泊8日の旅で、主な訪問先は広州、桂林、柳州、南寧である。

旅行の主要な目的は日中両国の大学生どうしの交流（教員の側から言えば、中国の大学生のすさまじい勉強ぶりに日本の大学生がショックを受けてほしいということ）という点においた。この点については、桂林での広西師範大学の学生諸君（留学中の永平君達の同級生）との交流、南寧の広西大学日本語科の学生諸君との交流でかなり成果があったように思われる。1年生で参加した1人の学生は帰国後感想文の中で「日本と中国では根本的に言って大学の意味が違うのではないかと思えてくるのです。今頃になってショックを受

けている次第です。」と書いている。願わくはこのショックを1人でも多くの他の学生に伝えてほしい。

桂林は世界に名高い山水画の世界で、ほとんど観光に終始したが、学生は空いた時間は町中にとび出して体当り的な中国語学習と自由な交流を行っていたようである。又留学中の永平君、樋口君が中国人の同級生達とホテルに訪ねてくれ近況報告かたがた日中大学生の交流を行っていた。大変恐縮したのは永平君の指導教官李譜英教授が生活指導の若い先生ともども、夜ホテルを訪ねてみえ、2時間位熊本からの留学生の様子や生活ぶり、それに中国語の指導の状況を具体的にお話しいただいたことである。李教授のお話では、2人とも非常に早く中国人学生の中にとけこみ、又中国語の上達も非常に速いとのことであった。事実、永平君が中国の学生達や先生と話すのを聞くと、とても留学して3ヶ月目とは思えない位流暢にしゃべっており、出発前の彼の中国語を知る者としては、ただ驚きの一語に尽きた。

桂林を出発する時は早朝にもかかわらず、師範大の学生が10名位見送りに来てくれ、連日の学生交流が行なわれた。〈次頁へ続く〉

次の柳州は広西壮族自治区の中では最大の工業都市であるが、風景も桂林に劣らない位すばらしいものであった。1日しか居なかったのではほとんど参観できなかつたが、全員がこの町で一番中国らしさを感じたのではなかろうか。

南寧は自治区の首都にあたる町で、目的の広西大学もここにある。ここでは大勢の人に会った。本学に留学中の李景芳さんの御主人、孫小唐君の母上、兄弟、奥さん、それに熊本から広西大学に來ている3人の方、そして広西大学の多くの教員、学生。

1昨年、北古賀学長が訪問された時会見された侯徳彭学長は自治区科学技術委员会主任を兼務され、大学の方は王奇浩副学長が学長代行をつとめておられた。その他の先生方は

ほとんど変りなく、張從徳先生、日本語の方木先生等にお会いできた。学生は学生どうし、教員は教員どうしで交流を行ない、有意義であった。王副学長はその席でも、又その夜教員4人をお招きいただいた夕食会の席でも熊本商大との交流を一層深めたいと強調された。学生の交流は時間がやや足らず、日中双方の教員が声をからして閉会を宣言しても、全く別れようとせず、記念写真をとるということで1ヶ所に集め、写真をとって終つてすぐ日本側の学生を無理矢理バスに押しこんでやつと双方を引き離した。学生の交流には1日かける位でないと不十分だと反省しきりであった。

費用を安くあげる為、旅行社の添乗員のいない旅だったが、教員、学生ともかなりの成果と満足感は得られたのではないかと思われる。

## 本学探検部 中国・桂林の鐘乳洞 探検調査を計画

本学の学生自治会所属サークルの探検部は、洞穴（特に鐘乳洞）の探検調査を主な活動としてきたが、今般、熊本市と桂林市の姉妹都市提携及び熊本県と中国広西壮族自治区との友好交流実現を機に、桂林市及びその周辺の洞穴の探検調査を行う事を計画し、探検部の顧問丸山教授を通じ、本学国際交流委員会に願ひ出が提出された。同委員会では、県と市を通じて、桂林市の関係機関に打診し、具体的な計画を提出してほしいとの回答を得て、探検部の安藤広幸君（経済学部3年生）を隊長とする部員10名は、早速具体的な計画を立て、県を通じ、桂林市に提出し、現在その回答を待っている。

## 中国の学校について



本学客員研究員

李景芳

広西大学

中国の学校についてよく聞かれるので、簡単に紹介しようと思う。

- (1) 学校の性質 中国には私立学校はない。全部国立学校である。教職員は政府の計画によって配置され、給料も政府からもらうのである。
- (2) 学校の費用

中国では義務教育はない。小学校の1年生から学費、教科書、そのほかの費用などを払わなければならない。ただ大学は教科

書のほか、寄宿費、水道代、電気代などが  
いらぬ。また、家庭収入によって政府から  
生活補助費をもらう。中国は国費医療制  
度をおこなっているの、医療費の心配が  
ない。各学校には衛生室もある。病気治療  
のほか、学生達に定期健康診断もおこな  
われる。勿論無料である。中国では学費、  
食費、寄宿費など全部ただなのは師範学  
校しかない。これは中国の昔から今まで  
続いている習慣と言われる。

- (3) 試験・跳級・進学 中国では小学校に  
入学の時には試験はないけれどその後は  
みんな試験がある。例えば1年生が2年  
生になる場合、試験を受けなければならない。  
若し不合格ならばもう1年、1年生の勉  
強をしなければならない。合格まで何  
回も試験を受けることになる。それに対  
して、成績の特別優秀な天才児童は程  
度によって跳級できる。今の中国科技  
大学少年班の大学生の平均年齢は13  
才ぐらいで、彼らはみんな

小学校とか中学校とか高等学校とかで  
跳級をして最後は大学の試験に合格し  
て、大学に入ったのである。人口が多  
く、大学が少ない中国では進学競争が  
とても激しい。しかし、学校によって要  
求は違う。例えば重点大学の入学総合  
点数が480点とすれば普通の大学は  
380点ぐらいでいい。また少数民族  
の受験生に特別の優遇もある。

- (4) 学生の自立性 日本は小学校から  
学生の自立性の教育を重視していると思  
う。その自立性を育てるためにいろい  
ろの授業をやる。見学旅行、合宿、カ  
ンプ、遠足、図画工作、家庭実習、修  
学旅行のような活動は中国ではほとん  
ど見られない。だから、学生の自立性  
から見れば日本の学生は強い方と思  
う。
- (5) 将来の仕事 中国の大学または  
専門学校から出る卒業生の仕事は全  
部政府によって決められるので就職  
の心配はない。

'84. 4. 22

昭和59年度 外国人留学生

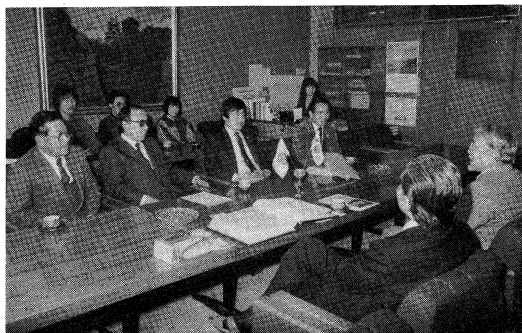
No.	在籍身分	氏名・生年月日	国籍(出身校)	受入れ先・指導教員名・研究題目
1	正規学生 私費留学生	方 基 奉 1958・11・10生	大韓民国 崇田大学校	熊本商科大学商学部経営学科
2	正規学生 私費留学生	洪 性 周 1950・1・14生	大韓民国 成均館大学校	熊本短期大学社会科第一部
3	研究生 私費留学生	楊 景 惠 1936・2・28生	台湾 台北師範专科学校	熊本商科大学・権藤正俊 経営管理総論
4	研究生 私費留学生	許 經 邦 1953・7・20生	台湾 徳明商業专科学校	熊本商科大学・高瀬泰之 日本経済について
5	研究生 外国政府派遣	孫 小 唐 1954・10・19生	中華人民共和國 広西大学	熊本商科大学・野尻秀之 経営意思決定支援システムに関する研究
6	研究生 県費留学生	村 上 オスカル 1954・4・7	ペルー フェデリコ・ピアレア国立大学	熊本商科大学・角松正雄 国際マーケティング
7	研究生 県費留学生	緒 方 佳 恵 1958・7・27	ブラジル イベロ・アメリカーナ大学	熊本短期大学・岩永久次 日本の教育全般について
8	研究生 県費留学生	清村径子シャーリン 1958・10・2	アメリカ合衆国 南カリフォルニア大学	熊本短期大学・岩永久次 日本の教育全般について

## 韓国との国際交流

### アンニョン ハシムニカ

去る2月9日、韓国忠清南道大田市にある学校法人恵和学園理事（大田大学）呉應準先生が来学した。大田大学からの来客は今年の夏に次いで二度目。ひとときではあったが学長、国際交流委員長と和やかに歓談し、友好の輪を広げた。大田市は首都ソウルから車で南へ2時間余りの忠清南道の道庁所在地。人口約65万の交通都市である。

県は昨年1月に忠清南道と姉妹締結をしており、今回両親善協会同士の結縁の運びとなり、民間交流の一環として本学を訪問したものである。



学長、交流委員長らと懇談の呉氏（左から3人目）ら

### 韓国ゼミ旅行

商学部 83年度梅村ゼミ生 今村豊三

「資本は何故外国へ進出するか」。このテーマで我々、梅村ゼミは総勢5名で韓国を旅することになった。

韓国に決めた理由は、九州から一番近くに位置すること。かつて加藤清正の時代、侵略した国であること。第3世界にはいること。この三つからであった。

釜山と慶州の2地区を旅したなかで感じたことは観光地として国が援助した都市部とそうでない地域の差が激しいということであった。一方では地下鉄が通り、他方では現在でも井戸を使った生活を行っている。

また、繁華街では電気製品、カメラ店等の専門店が軒を並べているのだが、百貨店のような大資本の進出は見られなかった。

この旅行のテーマは、韓国の物価が安いということと解かれた。低賃金故に外国が資本の進出を行う。このシステムを我々は肌でつかみ取ってきた。物価の安いところに目をつけて商品を購入する。これは途上国の労働者のピンハネと同様である。

3泊4日の韓国旅行は航空機を利用してある程度のお土産を買って約10万円と手ごろな旅だった。機会があったらもう一度行ってみたいと思っている。



現地の人と一緒に（右端：今村君）

## 留学生活一年間を経て



正規留学生・韓国  
金 亨得

熊本に来てからもう1年になった。振り返ってみれば去年は、私にいろいろな新しい経験を与えてくれたすばらしい1年だった。そしていま、初めて日本に来た頃を振り返り、ひとりで思い出し笑いをしている。“いただきます”と“ただいま”との違いが分からなくて、食事の時に“ただいま”と言って下宿生たちを笑わせたこともあるし、私の部屋に遊びに来た人が帰る時に私の方から“どうもおじゃましました”と言ってその人を当惑させたこともある。

大学での生活は大学の方々の細心な配慮と親切なクラスメートのおかげでむずかしいことはあまりなかったが、やはり言語の障壁があるから前期までは勉強に困ったことが多かった。私が感じた商大生の性格は、韓国の大

学生よりもっと親切だし、責任感が強いと思う。特にクラブ活動を見ると、皆が積極的に力を合わせて自分を犠牲にしながらクラブのために協力している。これはほんとうにすばらしいことだと思っている。しかし、どうして授業時間にはほとんどの人が急におとなしく(?)変わるかはまだ理解ができない。韓国の大学の場合、就職する時に、一番役立つものは成績であるから一生懸命に勉強するけれどクラブの活動には無関心な人が多い。しかし、私は、社会生活、人格形成、協調精神、自分の特技開発のためにはクラブ活動がきっと必要だと思っているし、日本人の良さである団体精神というものも多分クラブの活動から生まれたんじゃないかと思っている。

私はいままで日本の習慣、あいさつ、文化、経済、エチケットなどについてすこしずつ習ってきたが、まだまだ分からないことが多い。ことしからは習うことだけでなく深く勉強して日本を正しく理解する目を作りたいと思っている。

(商大商学部商学科第一部2年)

### 昭和59年度 教職員海外研修者

	研修名	所属	氏名	期間	研修先
1	海外出張	商学部	鷹 啓	S. 59年 7月～ 9月	イギリス・ロンドン大学
2	海外出張	短大	浜田 知明	S. 59年 7月～ 8月	フランス・イタリア・スペイン
3	海外出張	商学部	小谷 正守	S. 59年 7月～ 9月	ヨーロッパ
4	海外出張	教養部	渡辺 皓	S. 59年 7月～ 9月	ヨーロッパ
5	短期留学	短大	中野いく子	S. 59年10月～S. 60年3月	イギリス・ロンドン大学
6	長期留学	商学部	坂本 正	S. 59年 8月～S. 60年7月	アメリカ・コーネル大学
7	長期留学	教養部	佐藤 正年	S. 59年 8月～S. 60年7月	フランス・パリ大学
8	長期留学	短大	金子 俊恵	S. 59年 8月～S. 60年8月	アメリカ・クラーク大学
9	研修引率	商学部	中野 裕治	S. 59年 7月～ 8月	アメリカ・モンタナ州
10	研修引率	教養部	有本 純	S. 59年 7月～ 8月	アメリカ・モンタナ州
11	研修引率	学生課	桃井 芳雄	S. 59年 7月～ 8月	アメリカ・モンタナ州
12	職員研修	総務課	上田 信行	S. 59年 7月～ 8月	西ドイツ

# モンタナ短期留学生報告記

## 思い出の日々

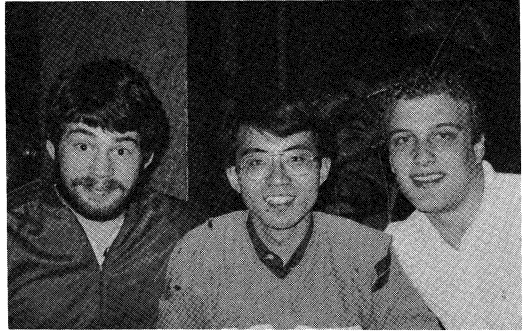
経済学部4年 清田忠臣  
(留学先: キャロル大学)

サンフランシスコ国際空港に到着したのは、2月12日午前9時過ぎであった。入国手続き等を済ませ空港を出た瞬間、「わあ、アメリカだ!」という感動を覚えた。タクシーで市内のホテルに行く途中道路の広さにも大変驚いた。

目的地のヘレナに到着し、空港で窓の外を眺めていると、優しいような顔をした人が急に近づき、「Are you Tadaomi?」と言われた。その方が私のお世話を下さった Dr. Swartout であった。学生の John も迎えに来てくれていた。すぐにキャロル大学の St. Charles Hall 学生寮に案内された。私の部屋は First Main と名のついたフロアー(2階)の124号室であった。部屋は2人用であったが、ルームメイトはいなかった(プライバシーを守ってくれるため)。1人ならば、自分の方から積極的に行動しなければ友達はできないと考え、John がたまたま同じフロアーにいたので、先ず彼の部屋を訪ねることにした。

私が John の室にいと、数人の学生が集まって来て色々話しかけてきた。かねてより英会話に少しは、自信を持っていたが、彼らの個人的な癖や学生が好んで使う俗語等に慣れるまでには少し時間がかかった。

翌日からさっそく授業に出席する事になり、生物学、心理学、スペイン語の3コースに出席することにした。授業形態はちょうど日本



の高校に似ており、40～50人程度の小人数で、50分間。驚いたことに、学生の中には、授業中にさえ野球帽をかぶっていたり、Pop(コーラなどの炭酸飲料)を飲んでいる学生もいた。しかし、彼らは我々日本の学生とは違い、かなり積極的であった。何でも理解できないことがあれば自然と手が挙がり、質問を何度も繰り返していた。

ところで、私は初日に友人になった Dan との約束で、最初の週末を利用して、彼の故郷であるワシントン州スポケーンを訪れた。モンタナ州から隣りのアイダホ州に入ったとたん時差があり、あわてて時計の針を1時間遅らせたのを覚えている。その日は1日がなんと25時間になってしまった。アメリカの広さには、本当に驚いてしまう。結局、ヘレナから州境を2つ越えスポケーンまで、ゆうに6時間はかかった。スポケーンでは Dan の家族にとっても親切にされ、初めてのホームステイを大いに楽しんだ。又、3月の最初の週末には、昨年商大を訪れた「モンタナ州立大の学生」にひと目会おうと、バスで州立大のあるポーズマンへと向った。バス停には、あの



懐しいTony Martel が迎えに来てくれていた。正に感動の瞬間だった。ポーズマン滞在中に、Todd Brewer, Karen Fay Hoy, Tom Gillully にも再会することができた。

キャロルの大学生、その他色々な人と接してわかったことは、先ず、彼らは日本人と違い、物事をはっきり言う。特にYesとNoがそうである。次に日本人はよく他人のことに干渉し、その反面自分のことはあまり干渉されたくないと思っているが、自分が干渉されたくないから他人のことも干渉しない。と言うのがアメリカ人の考え方らしい。その点、日本人は身勝手だと言えるだろう。

キャロル大学を去る2日前の夜、同じフロアの友達が、みんなでパーティを開いてくれた。送別会であることも忘れ、私は彼らとの楽しい時間を過ごした。また、翌日招待されたDr. Swartout, Dr. Wittmanとの夕食会も楽しいひとときだった。

キャロルでは、一緒にホームステイをしたDan や Kevinを始め、本当に沢山の学生と友達になれた。帰国後アルバムを整理していたら、30名近くもいたことに改めて気がつき、驚いているくらいだ。ルームメイトのいない私だったが、逆にそのことが私を積極的にさせこんなに多くの人々と知り合える大きな要因となったのだと思う。

キャロルを去る2時間ほど前から、彼らの1人1人が別れを告げに来てくれた。皆にWe really had a good time with ya, Teddy.”と言われた時には本当に嬉しかった。それだけに別れがとても辛かった。モンタナで得た友情は、私の心の中でいつま

でも消えることなく思い出として、生き続けることだろう。この楽しかった日々……青春の1ページとして、いつまでも大切にしたい。

## 短期留学を終えて

経済学部4年 国武 龍

(留学先: ロッキーマウンテン大学)

2月12日、大勢の人々に見送られ、熊本空港を出発、一路サンフランシスコへ向った。

同日、午前9時過ぎにサンフランシスコに到着。入国審査等を済ませ、“EXIT”の矢印に従って歩いていった。そして建物の外に出た時、そこで見たものは、ただの空港タクシー乗車場ではあったが、私は非常な興奮を覚えた。広い道路、大きなタクシー、何となくガンリン臭い様な空気、それはまったく日本とは違っていた。ここは確かにアメリカだ。10時間程前に日本にいたことを思うと狐につつまれた様な気持ちだったが、しだいにアメリカに来たんだという実感がわいてきた。期待と不安の入り混じった興奮が私をとらえて放さなかった。空港を出た時の第一歩、あのゾクとする様な興奮を、私は未だに忘れることは出来ない。

ロッキーマウンテンカレッジのあるビルングスは、モンタナ州最大の都市ではあるが、人口はわずか11万人である。

ビルングスの空港に迎えに来てくれたのは、大学のStudent Serviceのジルという女性だった。彼女が、私のインストラクターとしてよく面倒を見てくれた。

ロッキーマウンテンカレッジは、ビルングスの北部に位置する学生数500名たらずの小さな私立大学で、広さは商大キャンパスの約2倍程だが、体育館や学校の劇場の設備は充



実していた。特に体育館は、半分が地下に造られていた。中にはバスケットの試合ができる大きなジムと補助的な小さなジムを始め、スイミングプール（もちろん温水プール）、リフティングセンター、ラケットボールコート、数個の教室、それにサウナも完備しており、設備のよさには目を見張るものが多かった。

私は、40日余の滞在期間のほとんどを、寮ですごした。寮は、大学のキャンパス内にあり、部室は約6畳程で、多くが2人部屋だった。私の部屋も2人部屋で、ルームメイトの名前は、マーク。ワシントン州から来ている体育学部3年生で、映画が好きで、ビデオをもっており、テープを借りて来てはいつも見ていた。彼は昼間は授業、夕方からアルバイト、夜はテレビを見ているか、又はデートに忙しい毎日を送っていた。

私は、大学では月・水・金曜日にそれぞれ1科目の授業に参加した。生物、英語、そしてドラマであった。

授業は、15名程で行なわれるが、教壇といったものは、全くなく教授も学生も自由に意見を述べ、質問しながらごやかな雰囲気が進められていった。

3週間経つと大学は、1週間の春休みに入り、みんな、“Have a good vacation”の言葉を残して寮を去っていった。私は、ジルのお世話で、ホームステイをすることになった。これはアメリカ人の生活を体験でき良い経験になった。

また私がお世話になった家庭は、日本に対して非常に興味をもっておられ、御主人は、自分のコレクションだと言って日本のコインを見せてくれたが、それは、1円玉、5円玉、10円玉であり、かえって私の方が興味をそそられた。

私が、この留学で感じたことは、考え方の違いである。例えば、2人で話しをしていても時間になると「もうねる時間だ。また今度にしてくれ」「勉強するので（部屋から）出ていってくれ」と平気で言うのである。初めてこれを言われた時、私は驚いてしまった。日本ならせつかく話が盛り上がっているのだから……とか、大変申し訳ないのだが、実は勉強しなくては……と言うところだろう。しかし時間が経つにつれてこれがアメリカの考え方なんだと思う様になった。私は、文化の違いを身にしみて感じた。それと英会話についてだが、話す力も大切だが、聞く力が非常に大切だと感じた。話が理解出来なければ聞き返せば良いのだが、何回も聞き返しているのでは、お互いにつかれてしまう。しかし、この研修で得たものは大きかった。アメリカ人の生活、考え方を知り、日本についても客観的に見ることができた。これらは私の血となり肉となるものと信じている。

とにかく失敗を恐れずに何事にもチャレンジする。そしてそれが、何なのか、本質を自

分の力で見極めて自分なりのそれについての意見をもち判断を下す。

主語は、すべて“ I ”である。

“ I ”の多用とバイタリティ、考えてみる価値はあると思う。

## モンタナからの来訪者

2月26日に、モンタナ州教育協会のジョン・C・ボード会長が、本学を表敬訪問し、学長はじめ国際交流委員と会談した。ボード会長は、熊本の小・中学校を5日間に渡って視察した。

3月16日には、モンタナ大学のニール・S・バックルー学長が本学を訪れ、学長・国交委のメンバーとの会談及び、今年夏にモンタナ大学へ行くサマープログラム参加学生達とも話し合いの機会を持った。バックルー学長は、44才という若さで、その気さくな人柄に学生達は好感を持ったようである。また、バックルー学長は、本学の他に熊本大学の松山学長、RKKの水野社長とも会談し、翌17日次の訪問地に出発した。

## キャロル大学との交流

商大から過去2回、キャロル大学に学生を派遣したが、今夏キャロル大より教授・学生が本学に来ることになった。

学生は、フィル・スーイック君とミンディ・マスさんの2名で、6月2日～7月上旬を本学で過ごし、その後2週間を国内旅行する予定。在熊中は、本学学生・教職員宅にホームステイし、交流を深める。受け入れ計画は、ESSの学生が中心になって作成している。

ホストファミリーは下記の通り。

池田 好弘(経済学部3年)

国武 龍(経済学部4年)

清田 忠臣(経済学部4年)

日置加奈子(教養科2年)

田中 利彦(本学助教授)

中野 裕治(本学助教授)

小幡 安信(本学職員)

また、教員の方は、マイケル・ロビンソン教授(経営学部・学科長)が、6月11日から約2週間の予定で本学を訪れる。その後1週間は東京に滞在し、6月末に帰国する。



懇談するバックルー学長

## 教員交換プログラム

本学とモンタナ州諸大学との姉妹提携を促進させる為に、今年の9月から翌'85年8月までの1年間、教員の交換派遣が実施されることになった。アメリカ側からは、モンタナ州立大学のディーン・ドレンク準教授(経営財務論・経営政策論)が、商大で経営学関係の講義及び英語を担当する。また、商大からは、中野裕治助教授(経営学総論・経営組織論)が、モンタナ州立大で経営学関係の講義及び日本語を担当する。

# 第1回モンタナ研修サマープログラム近づく

モンタナ大学システムと本学との交換プログラムの一環として、昨夏モンタナから研修視察団一行23名が熊本を訪れたが、今年は逆に本学から研修団を派遣する。すでに参加学生も決定しており、現在その準備として、英語と専門分野について、事前研修を行なっている。24名の学生達（男性16名、女性8

名）は、アメリカに関する学習と、滞在中に十分なコミュニケーションができるよう会話の特訓を受けている。

更に、5～6名の小グループに分かれ、各グループでは独自の研究テーマを設定し、専門の勉強も進めている。

日程及び参加者は以下の通り。

## 研修プログラム

### 〔日程〕

昭和59年7月15日～8月21日 38日間

- 第1週** アメリカ・ワシントン州シアトル着。シアトル市内観光。ボンデパート、ボーイング社見学。モンタナ大学で講演会。グレーシャー国立公園にてオリエンテーション。ヘレナで州知事表敬訪問。ビューートの銅山見学。
- 第2週** モンタナ州立大学キャンパス見学、歓迎会、スポーツ、英語研修、講義。ビルングス市訪問。週末は川下り。大学寮滞在。
- 第3週** モンタナ州内企業研修。週末はイエローストーン国立公園へ。
- 第4週** モンタナ州立大学にて英語研修、講義、スポーツ。ゴーストタウン観光。ホームステイ。お別れパーティー。
- 第5週** サンフランシスコ観光、カリフォルニア大学バークレー校寮滞在。ロスアンジェルス観光。南加熊本県人会ホームステイ。ハワイ観光。

## 参加学生

### 〔商大経済学部〕

榎田 弘 4年  
桂木 圭一 4年  
田中 寿郎 4年  
長田 薫 4年  
浅井 俊光 3年  
石原 敦 3年  
小西 竜二 3年  
立石聡一郎 3年  
濱田 剛 3年  
矢野 信哉 3年  
大濱 順和 2年  
高三瀦 晋 2年  
藤川 修朗 2年

### 〔商大商学部〕

大塚 宏子 4年  
川口 幹生 3年  
徳永 智美 3年  
堀江 英徳 3年  
森澤 勝 3年  
津田 昌幸 2年  
〔短大教養科〕  
青木 洋子 2年  
柿本 篤代 2年  
日置加奈子 2年  
本田真由美 2年  
山崎美由紀 2年

### 〔引率者〕

中野 裕治 助教授  
有本 純 講師  
桃井 芳雄 学生課

## 留学生のための日本語教育

本学助教授 三石 泰子

国際交流とは国家・民族の異なる人間同志の交流ということであるが、いろいろなレベルの交流があり得よう。大学という教育機関における交流は、総合的学問的なものであって、文化の異質性と共通性を客観的に認識することが目的とされると思う。その手段としての言語は最初にして最終的なもの、即ち、文化理解の手段であり、文化内容それ自体である。このように、「ことば」の役割は初めから終りまで切り離すことができないのである。

熊本商科大学・熊本短期大学が、留学生のために日本語教育を始めたのは58年度から、正式に制度化されたのは今年度からである。昨年度は国語国文学の4人の教師が、2～3人の留学生を受けもって、それぞれのやり方で勉強した。わたしの場合は、3人の学生と『日本語Ⅱ』（東京外大）のテキストを学習した。文法表現の基本的型を理解すること、語彙をふやすことを目的とした。読書量を増すために、岩波少年文庫の『足長おじさん』『不思議の国のアリス』『ドリトル先生』などを自習のための本にして各自に読んでもらった。これらは中学生向けの本なので、漢字に仮名がふってあり、自習に適している。また会話の練習のため、食事、経済生活などについて話したが、食生活の違いについてはおもしろい比較ができた。中国人と韓国人は納豆を気持悪がって拒否反応を示す。そのかわり豆乳を摂る。

日本語教師の立場からいうと、留学生とつき合おうと日本語はもちろん日本文化について



永末・三石両教授による日本教育

再認識をうながされることが多い。つまり交流とは相互理解のことだから一方的に日本語だけを学んでもらうことはあり得ない。わたしたち自身が幅広い視野をもって他文化を理解していくことが同時に行われなければならない。こういう点からも日本語教育は非常に刺激になる授業である。

## e v e n t s

- S 58.11.18 「海外留学帰国報告講演会」(牧野洋一・西園寺明治・酒井重喜の3教授)海外事情研究所主催
- 12.12 国際交流セミナー「東南アジアの工業化と日本経済」海外研主催  
テッサ・モーリス・鈴木(オーストラリア・ニューイングランド大学)
- S 59.2. 9 韓国・忠清南道恵和学園理事呉應準氏ら4名来学
- 2.16 モンタナ州教育協会会長ジョン・C・ボード氏来熊
- 2.24 中国・広西壮族自治区教育友好訪問団8名来学
- 3.12 県費・私費留学生歓送会、於熊本交通センターホテル
- 3.16 モンタナ大学学長ニール・S・バックルー氏来熊
- 4.13 県費・私費留学生歓迎会 於学内

◎国際交流委員会メンバー

商学部長・経済学部長・短大部長・教養部長・教務部長・学生部長・海外事情研究所長  
総務課長・（委員長 田島司郎）

◎同委員会特別委員 西園寺明治・中野裕治・西紀昭・有本純

◎「国際交流レター」編集委員 中野裕治・有本純・塚本諄・桃井芳雄・坂本淳子

---

熊本市大江2丁目5番1号

**熊本商科大学**

**熊本短期大学**

〒862 TEL. (096) 364-5161

---